

第5話 院政

院政が始まって藤原氏の専横は全く抑えられた。今度は政治上の命令が主として院の御所から下って、朝廷の政治はまた乱れる。この間に僧兵の勢いも盛んになる。

院庁と院司と院宣

白河上皇が院政を始めてからは、藤原氏の勢力は全く衰えたが、院政をなさるに就いては、朝廷とは別に院の御所を置いて、別に役人をも置き、そこからいろいろの命令を下すこととなったために、折角藤原氏の専横を抑えることには成功しても、天皇の親政とはならなかった。院の御所に置かれた役所を院庁といい、其の役人を院司といった。又、院中を警衛するためにも別に武士を置いて、これを北面の武士といった。その詰めているところが院の御所の北面に在ったからです。院庁から下しになる命令を院宣、または院庁の下文といったが、その威は詔勅よりも重かったので、以後は天皇もただ御位においでになるに過ぎない有様となり、摂政関白の官職も飾物と同じになりました。

即ち、久しく外戚の藤原氏の手に在った政治の実権が、今度は上皇の院の御所に移ったのであって、それが朝廷を離れていることには変りはなかったのです。かくの如きは明らかに一つの変態ですから、後には命令が天皇と院との二途から出る事もあるようになり、終には天下の大乱をさえ招くに至ったのです。

白河法皇の仏教尊信

さて白河上皇は深く仏教をお信じになり、髪を剃って法皇となられたが、其の後も院政はお続けになり、第73代堀河天皇、第74代鳥羽天皇、第75代崇徳天皇と御子から孫、曾孫に至る3代の御宇43年にわたって政治をされた。法皇は仏教を御尊信のあまり、しきりに寺々を建てて盛んな法会を行わせたり、仏像や堂塔を無数に造らせたり、殺生を禁断して魚や鳥を放させたり、又、御みづから険しい山路を攀じて、高野山や熊野に十余度も参詣になった。

そのお建てになった白河の法勝寺においでの際には、いつも1,000人の僧に読経をさせ、100台の灯明に百人の僧をして一時に火を点けさせるという盛んな事を好んでなされ、其の上、壮麗な宮殿を造らせると言う風で、国家の費用を惜しみなくも使ったので、忽ち財用が乏しくなった。それを補うために皇室の荘園を諸国に立てたが、それでもなお足らなくなると、米一万石、絹一万疋を献上する者には誰にでも国司の任を授けたり、堂塔や仏像を造る費用を出した者には、重ねて国司の任に當ることを許したりした。

さきに英邁な後三条天皇が断乎としてご改革に成った事にも、かくしてここに全く覆されて、ついに政治はまた乱れるようになったのです。



僧兵

三つの思うようにならぬ事

けれども、^{しらかわ}白河法皇ご自身は、^{しんせい}天皇としての親政の14年と院政の43年と、合わせて57年の間、全く一人で何事も思いのままにされたので、常に盛んな^{いせい えいが}ご威勢と栄華とに包まれて、その77年の^{しょうがい}生涯を申し分なく幸福に終わられたのですが、その法皇がある時、「世の中に^{わし}朕の思うようにならぬのは、ただ^{すごろく さい やまほうし}賀茂川の水と、双六の采と、山法師とだけである」と^{なげ}歎かれたことがある。

双六の采と賀茂川の水とが自由にならないのは誰にも分かるが、山法師とはそもそも何でしょう。

ここに山法師というのは^{えんりやく そうへい}延暦寺の僧兵の事です。

だが僧兵とは何か？ そのころ、^{じじょう もと}武士が起こったのと同じような事情の下に起こった、^{へい}寺々の兵です。

当時は^{ぶっぼう}仏法が広く一般に^{とうと}尊ばれたために、上下共にこれを信ずるものが多く、寺院はどこも皆栄えたが、中でも^{ひえいざん えんりやく}比叡山の延暦寺は^{こうじょう ちんご}皇城の鎮護として朝廷のご崇敬が厚く、^{すうけい あつ}奈良の興福寺は^{こうふく}藤原氏の^{うじでら}氏寺として常にその^{ひご}庇護を受けていた上に、^{しょうえん}両寺共に多くの^{すこぶ}莊園を有して^{ふゆう}頗る富裕だったので、その勢力が最も盛んでした。これに次いで^{おうみ みいでら}は奈良の東大寺、近江の三井寺などが勢力を振るっていた。

僧兵の起こり

前にも^{たびたび}度々いったように、^{あや}藤原氏が政治を誤まって世の中が^{ぶっそう}一たいに物騒になると、これらの諸大寺にしても、自家の領地を保護して安全にしておくには、ちょうど地方の豪族が^{やしな}武士を養って自ら守ったのと同じように、^{へいし}兵士を必要としたのです。

それで、初めは、^{ちやうはつ}莊園内の民から徴発して自家の領地を守らせていたが、そのうちに、^{ひど}国司の酷い課税や課役を^{のが}脱れるために、郷土を離れて僧となって寺に入って来た者共を一緒に集めて、^{ぶっぼう}仏法保護の名の下に^{ぶげい}武芸を練らせて、これに寺院や領地を^{けいご}警護させることとした。これが即ち僧兵の起こりなのであります。

ところが、^{だじゃく}官兵が全く懦弱で役に立たない時代の事ですから、これらの僧兵は、数が多く勢いが盛んになると共に、^{おうぼう}次第に横暴となって、^{そうりよ}僧侶にあるまじき^{ろうぜき}狼藉を^{はたら}働いたり、諸大寺の間で互いに相争って戦ったりしました。

^{かすが}春日の神木と^{ひよし}日吉の神輿

それが院政時代になると、^{しらかわ}白河法皇が仏教を厚く信仰されたのに乗じていよいよ甚だしくなり、^{かすが}ついに諸大寺の間で相争うばかりでなく、何か不平があると、^{かすが}興福寺の僧兵は^{しん}春日の神木、即ち春日神社の神

第5話 院政

たい かつ だ ひよし みこし かきあ どうどう く
体を担ぎ出し、延暦寺の僧兵は日吉神社の神輿を昇上げて、何百人、何千人という大衆が堂々と京都に繰
り出して朝廷に強訴ごうそするのを常としました。そしてその言い分いぶんが通らなければ、神輿や神木をどこへで
も捨てて行ってしまおうのです。深い迷信めいしんに捉われた臆病おくびょうな公家達たが、神仏の崇りを恐れて、その神木
や神輿をどうすることも出来ない弱みに付け入って無理を通そうとした。さすがの白河法皇しらかわも、これに
は非常に困られて、さてこそ先にいったような嘆声たんせいをお出しになったのであります。

やまほうし ならほうし 山法師と奈良法師

かくて山法師やまほうしといえば延暦寺の僧兵の事であり、奈良法師ならほうしと言えば興福寺の僧兵の事であるのが当時
の常識でして、京都の人々はどんなに彼らの乱入らんにゅうを恐れたか知れなかったのです。しかも朝臣ちようしんは
柔弱にゆうじやくで僧兵の暴行を抑えることが出来なかったので、朝廷はよんどころなく源平の二氏に命じてこれを
鎮めしづ、京都を守らせました。これが藤原氏に代わって武士が次第に勢力を京都に得るようになった始め
で、後に武士が天下の政権を握る基もとともなったのであります。

(第5話 院政いんせい 終わり。次は前頁に戻り、第6話 平氏しゅつせの出世 へ)